# Medical Technology News

# 臨床検査室新聞

２０１０年１２月
第１８号
発行元　八雲総合病院
臨床検査室

## 心原性塞栓症ってなーに？

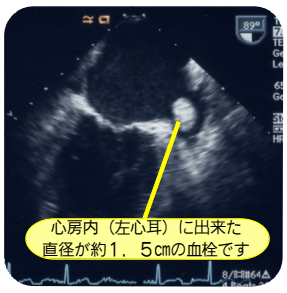
### 心房細動とのかかわり

心原性塞栓症とは心臓の中にできた血栓（血の塊）が血液と一緒に血管を流れ、手や足、脳の血管を詰まらせてしまう病気です。原因となる疾患にはいろいろとありますが心房細動がそのひとつにあげられます。

心臓は心房と心室という2つの部屋が規則正しく収縮と拡張を繰り返すことによって血液が体全体に流れるように動いています。（心臓に流れてきた血液はまず心房に入り次に心室に入りまた血管に送り出され流れていきます。）

心房細動になると部屋の1つである心房の動きが細かく震えるような動きになり勢いよく血液を心室に送り出すことができなくなってしまいます。このことで心房の中に滞る血液が多くなってしまい血栓が出来やすい状態になります。ここで出来た血栓が心原性塞栓症の原因となるため心房細動の管理と治療が重要になるのです。心房細動での血栓予防にはワーファリンという血液を固まりにくくするお薬で管理する方法があります。

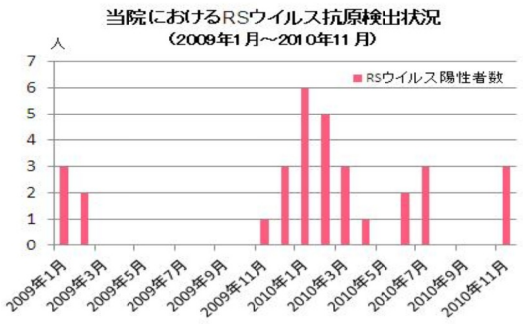
超音波で心臓を見ると血液が滞っている部分は白くもやもやとした煙のように見え、血栓は白い塊として見えます。心臓内にこのような所見が見られないか私たち臨床検査技師は注意深く観察しながら検査を行っています。




## LOOK

### RSウイルス感染症について

RSウイルスは、冬季の11月～3月ぐらいに流行のピークがみられ、下図のように、当院での検出状況もおおよそ同様の傾向となっています。




RSウイルス感染症は、すべての年齢層に対し、普通感冒、気管支炎、細気管支炎などの急性呼吸器感染症を引き起こしたりしますが、その中で問題となるのは、2歳未満の乳幼児がかかりやすい細気管支炎です。症状は、4～6日の潜伏期を経て、微熱・咳・鼻水などの上気道症状が2～3日続き、その後、呼吸性喘鳴（ぜいめい）・哺乳力低下・多呼吸・チアノーゼなどの症状がみられます。特に、3か月未満の乳児では、無呼吸を呈し重篤化することもあるため、早期診断が重要となります。

当検査室では、鼻腔のぬぐい液から、RSウイルスを約20分で検出可能な迅速診断キットを取り入れています。

## チェック！ テーマ

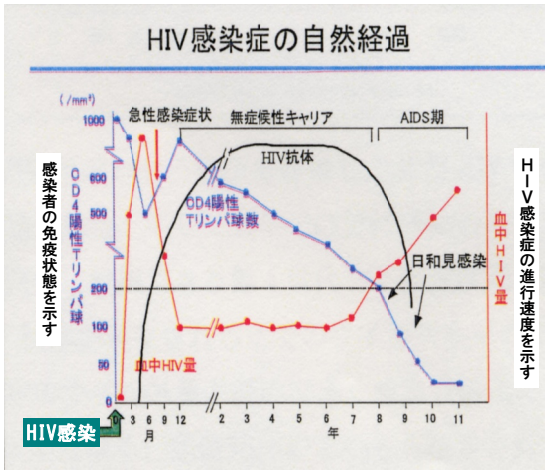
## HIV感染とAIDS（エイズ）

**感染を早く知ることが重要です！**

厚労省の発表によりますと、平成21年の日本におけるＨＩＶ感染者・ＡＩＤＳ患者の新規発生件数は１４５２件でした。

【ＨＩＶ感染の自然経過】

左表はＨＩＶ感染の自然経過を表したグラフです。ＨＩＶ感染後約１ヶ月でインフルエンザ様症状が出ることがありますが、多くのＨＩＶ感染者には自覚症状がありません。その状態が平均で１０年間程続きます（無症候性キャリア）。この状態を過ぎると、免疫力低下によって、ＡＩＤＳ発症前に発熱、下痢、リンパ節腫脹、体重の減少、口の中に白い斑点が出来るという症状がしつこく続きます。




やがて健常人では通常感染しない病原性の低い微生物などの感染（日和見感染症）や腫瘍などの合併症を発症しＡＩＤＳ期になります。

【治療の現状】

ＨＩＶ感染者の治療はＡＩＤＳへの進行を防止するために、抗ＨＩＶ薬を２～４剤を服用します。一般的に、臨床症状、免疫機能（ＣＤ４陽性Ｔリンパ球数）、血中ウイルス量でモニタリングします。

## 検査技師会での学術活動

去る11月7日、市立函館病院で第66回道南地区会臨床検査技師会が開催され、当検査室から３演題を発表しました。また11月13・14日には、木古内町国保病院で第47回道南町立病院検査技師会が開催され、松本技師が「当院における輸血検査の現状と課題」と題して発表してきました。

「継続は力なり」

## ほっと time

夕飯の定番メニューといえばカレー。
そこで、検査室の女子職員に我が家のカレーの隠し味を聞きました。1位ソース・ケチャップ、2位チョコレート、3位りんご。他には牛乳、醤油、インスタントコーヒーなど。意外なところでは赤ワイン。カレーにはそのご家庭のこだわりの味があるようです。

## 検査の基本

### ＨＩＶ検査について

ＨＩＶ感染は、ＨＩＶ抗体、ＨＩＶ抗原、ウイルス分離、遺伝子検査のいずれかが検出されて診断されます。ＨＩＶ感染症検査試薬にはスクリーニング検査と確認検査があります。当検査室では、ＨＩＶ抗原抗体のスクリーニング検査を行っています。

12月1日は世界エイズデーでした。　皆で検査を受けましょう！

## 編集後記

早いもので、今年もあと一ヵ月を切りました。
この一年間、臨床検査室新聞をご愛読していただき、ありがとうございました。分りやすさをモットーに書いてきましたが、どうだったでしょうか？
来年もより一層分りやすく、充実した内容をお届けしますので、引き続き検査室新聞をお楽しみください。